

# 論文の要旨

論文題目 現代中国語の結果補語表現に関する研究  
—日本語との比較対照を通して—  
氏名 黄 春玉  
学位 博士 (学術)  
授与年月日 平成 19 年 7 月 31 日

本研究は現代中国語の結果補語表現を日本語との比較対照を通して、自動性・他動性と動態・静態という意味特徴を中心に、考察するものである。本研究は以下の7章から構成される。

- 第1章 序論
- 第2章 結果補語表現の自動性と他動性
- 第3章 アスペクトから見た結果補語表現
- 第4章 受動文から見た結果補語表現
- 第5章 動詞句との共起から見た結果状語と結果補語
- 第6章 主観性と結果補語表現
- 第7章 結論

第1章の序論では研究の目的、結果補語の定義と分類及び本研究の構成を述べる。

第2章では動補構造の自動性・他動性について述べる。まず、自動性・他動性の定義を明確にし、次に、他の文成分との関係の側面から動補構造の自動性・他動性を明らかにする。最後に、日本語の結果表現との対応性を考察する。

第3章ではアスペクトの側面から結果補語表現の意味特徴を分析する。時間軸上においては結果の意味を「結果達成」と「結果状態」の二類に分けることができ、前者は動的であり、後者は静的である。両者の動態・静態という意味特徴は時間成分や“了<sub>1</sub>”などとの共起においていかに反映されているかをこの章の考察の目的とする。

第4章では受動文の側面から日本語と対照させて結果補語表現を考察する。仕手の位置の名詞句は原因・手段と見なされることと、能動・受動の結果表現の他動性・自動性という意味の特徴とがいかに関連しているかを日中対照の立場で考察する。

第5章では動詞句との共起の側面から、結果状語と結果補語の違いを分析する。まず、結果状語の定義を明らかにしたうえで、動詞句との共起を通して結果状語の意味機能を記述し、次に、結果状語と結果補語の意味機能の違い、及び結果状語と日本語の結果の副詞の意味機能の

違いを動態・静態の側面から述べる。

第6章では主観性の側面から結果補語が話者の主観といかに関係するかを調べる。この章では動詞と補語の意味関係や形容詞の主観性・客観性などの側面から、「過分義」の結果補語表現の主観性を分析し、「過分義」表現と自動詞的な表現の関係を明らかにする。

第7章の結論では本研究の研究成果をまとめ、今後の課題を述べる。

以上各章で論じた主な内容を次のように、Ⅰ) 自動性・他動性、Ⅱ) 動態・静態、Ⅲ) 日本語との比較対照という三点にまとめることができる。

### Ⅰ) 自動性・他動性について

まず、自動詞述語の動補表現についてであるが、先行研究は“孩子哭哑了嗓子”の例のように、述語が自動詞であっても動補構造全体は他動詞的であるとしている。しかし、本研究は主語・述語・補語・目的語の意味関係に着目し、このような表現は補語の表わす変化が主体自らの行為によるものであるので、再帰構造の表現であり、自動詞的な表現であるということを指摘する。また、他動性のプロトタイプは動作主が対象に変化を起こすべく、意図的かつ直接的に働きかけるという意味を表わすが、しかし自動詞述語の動補表現はこの他動性の意味特徴を備えていない。ゆえに、本研究は自動詞述語の動補表現は自動詞的であると考え。そして、このような自動詞述語の動補表現のプロトタイプは再帰性という意味特徴を持つということを明らかにする。

次に、受動文における結果補語表現の自動性・他動性についてであるが、先行研究は“爸爸咳嗽醒了妈妈 → 妈妈被爸爸咳嗽醒了”のような能動文が成立しないのに対し、受動文が成立する結果補語表現に対し、受動文の動作主は有責者の意味役割を果たすという観点から説明している。しかし、有責者も動作主の中に含まれるので、この見方は妥当ではないと思われる。本研究は原因・手段という観点から能動・受動の対立と自動性・他動性と関連させてこの問題を解明する。この例の能動文では他動性が要求される。“咳嗽”という動作は自動詞であり、対象の状態変化を引き起こす働きかけ性がないので、文は成立しない。一方、受動文では受動者を主語に立てることにより、受動者の状態変化は文の中心の意味となる。つまり、この表現は受動者の変化を表わす自動詞的な表現となるのである。そして、この場合、“爸爸咳嗽”は結果事態を引き起こす原因と見なされて、背景化される。そのため、この文は成立する。

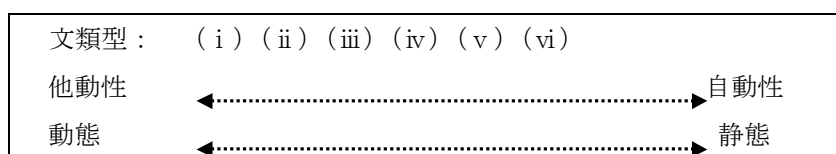
最後に「過分義」の表現と自動性の関連について述べる。従来の研究は“买贵了”が目的語を伴うことができないのは動補構造の自動性に起因するとしている。しかし、本研究は主観性の側面からこの問題を述べ、動補表現“买贵了”は過分義を表わす主観的な表現であるため、目的語を伴うことができないことを指摘する。

### Ⅱ) 動態・静態について

先行研究は結果補語表現が変化性事態タイプであるとしている。この意味においては結果補語表現は動態性事象を表わすということになる。しかし、結果補語表現は他の文成分の影響に

より、静態的にとらえることもありうる。結果補語表現の動態性・静態性が他の文成分といかに関係しているかについては従来の研究は明確な議論を行っていない。本研究は構文レベルでこの問題を考察していく。その結果、稼働期間成分や様態状語及び完結相として機能する“了<sub>1</sub>”と共起する場合、結果補語表現は動態性を表わし、単純期間成分や結果状語及びパーフェクトとして機能する“了<sub>1</sub>”と共起する場合、結果補語表現は静態性を表わすということを明らかにする。

上述した I)、II) における代表的な文類型は (i) 動作主主語文、(ii) 有責者主語文、(iii) 変化主語文、(iv) 原因主語文、(v) 受動者主語文、(vi) 場所主語文である。これらの文類型に見られる自動性・他動性、動態・静態という特徴は次のように示すことができる。



【図 1】文類型の意味特徴

### III) 日本語との比較対照について

まず、動補表現と日本語の複合動詞表現の対応性について調べるが、その結果、以下のことを明らかにする。動補表現と複合動詞表現の対応例を見てみると、対応性の高低は他動性の高低と平行している。そこには述語と補語の関係及び日中両言語の根本的な違いが反映している。つまり、他動性の高い動補構造は日本語の複合他動詞表現と「動作主の働きかけにより、対象の状態変化が生じる」という意味特徴を共有しているので、両者の対応性が高い。しかし、自動性の高い動補構造では補語と述語は基本的に因果関係であるのに対し、日本語の複合動詞の前項と後項は基本的に因果関係ではない。そのため、両者の対応性が低いのである。

次に、動補表現と日本語の結果の副詞表現の対応性について考察するが、その結果、次のことを明らかにする。結果の副詞は動詞の限定成分であるので、動態を表わす意志性他動詞と共起する場合、[+意図性][+制御性]の結果を表わさなければならない。一方、結果補語は動詞の限定成分ではないので、動態を表わす意志性他動詞と共起する場合、[±意図性][±制御性]の結果を表わす。ゆえに、動態を表わす動詞句において結果の副詞と結果補語が対応するのは「彼は穴を深く掘った」→“他挖深了坑”のような[+意図性][+制御性]の結果表現に限られ、[-意図性][-制御性]の結果表現は「\*靴は大きく買った」≠“鞋买大了”のように両者は対応しない。